

R-3 野外教育の指導場面におけるアクティビティアプリ使用実践に関する報告

A report on Practical Use of Activity Apps in instructional settings for Outdoor Education

○甲斐知彦（関西学院大学）、
西垣幸造・下村悟・嶋晏澄（公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会・関西学院大学）、
伏田昌弘（東京コンピュータサービス株式会社）、平林真実（情報科学芸術大学院大学）

キャンプにおける指導者は、学びの舞台となる自然や活動と参加者を繋ぐメディア（媒介）にとらえ、その役割の一部をテクノロジーに担わせることで指導者のリソースにゆとりを生み、そのゆとりを参加者との学びのための対話にあてることが可能になると考えている。例えば、指導スキルを解説するアプリを使うことで経験の少ない指導者や普段、野外活動に関わることのない小学校教諭などが指導場に立つハードルを下げ、野外教育の当事者として、より積極的に参加者と関わるができるのではないかと考えている。本実践では、そのひとつとして、野外炊事のカレーライスやカートンドック作りといった指導場面で、そのやり方を説明するアプリを使用した様子を報告する。また、そこから生まれる可能性についても言及したいと考えている。

R-4 東京家政学院大学児童学科が主催する「森のようちえん」の取り組み

：サービスマーケティングの観点からみた大学生の学びの検討

Outdoor Experience Program for Children Held by Tokyo Kasei Gakuin University: An Examination of University Students' Learning from the Service-Learning Perspective

○佐藤冬果（東京家政学院大学）

サービスマーケティング（SL）は「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」であり（中央教育審議会, 2012）、大学生の主体的な学修を促す教育プログラムとして注目が高まっている。東京家政学院大学児童学科では、近隣地域の幼児・児童を対象とした自然体験活動プログラム（森のようちえん）を月1~2回、土曜日に実施しており、児童学科に所属する1~4年生の学生がその企画運営にあたっている。授業等で学んだ保育・教育に関する知識を実際の幼児・児童との関わりに活かしている点で、本活動は、保育者・教員養成課程の授業の枠を超えて、SL型の学びの場としての機能を有する可能性を有していると考えられる。本報告では、授業内容および学生の学びに関するレポートをSLの観点から考察し、その成果と課題を報告する。

（本研究はJSPS科研費（23K12802）の助成を受けたものです。）